

氏名	やすだ てるお 安田 光男
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第922号
学位授与の日付	平成31年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 建築学専攻
学位論文題目	古代ローマ住宅ペリスタイル列柱における視覚効果による空間演出の手法に関する研究
審査委員	(主査)教授 松隈 洋 教授 阪田弘一 教授 金尾伊織

論文内容の要旨

本論文は、古代ローマ時代の建築家が、住宅において、中庭を囲むペリスタイル(列柱廊)の柱の配置によって、どのような視覚的効果を用いて空間の演出を行っていたのか、を明らかにすることを研究の目的としている。そのために、比較的保存の状況が良好であるポンペイ遺跡の住宅を分析の対象とする。さらに、先行研究によって指摘された2つの視覚軸、すなわち、①ファウケス(玄関)からペリスタイルへの視覚軸と、②トリクリニウム(接客用の食事室)からペリスタイルへの視覚軸の影響が顕著であるため、この2つの視覚軸が存在する住宅、つまり、アトリウムとペリスタイルの両方を持つ邸宅100件に絞り、さらに、視覚的操作の確認が可能な信頼のおける平面図が供給されている12件の邸宅を研究の具体的な対象としている。

まず、第2章では、ポンペイ有数の邸宅で多くの研究の対象となっているメナンドロスの家を取り上げ、先行研究の知見を検証した上で、CG(コンピューター・グラフィックス)を作成して、視覚的操作の考察を行った。その結果、①については、ペリスタイル北側の列柱が7本から5本に間引かれたことで、初源的な遠近法の効果で実際の距離よりも長く見えるように設えられたこと。また、②については、紀元後にトリクリニウムからの視覚軸を意識して、ペリスタイル東側の柱間が間引きされて広げられていること、さらに、紀元62年以降には、その視線の基点がトリクリニウムの主人と主賓の座席位置である〈the places of honor〉を焦点にして、壁の変更まで行われていることなどを明らかにした。

第3章では、同じく多くの研究がなされているヴェッティの家を取り上げ、①については、ファウケスからの視覚軸を意識してペリスタイルの柱間の調整が行われていること、②については、〈the places of honor〉を焦点とする視覚軸から、ペリスタイルの柱間を操作し、視覚操作を利用した空間演出が行われていることを、CGによって明らかにした。

さらに、第4章では、それ以外のポンペイの邸宅を取り上げ、ペリスタイルの列柱の視覚操作がどの時代に行われていたのかを確認した上で、視覚操作の有無による邸宅の違いについて考察した。その結果、ペリスタイルの列柱の視覚操作は、ポンペイに導入された紀元前1世紀頃には見られず、それ自体の対称性が重視され、幾何学的な秩序をよりどころに設計されていたこと。しかし、次第に傾斜した列柱の配置や均等ではない間隔の柱配置が行われるようになり、トリク

リニウムの〈the places of honor〉を焦点とする特定の地位の人間の視点から風景を美しく見せる方法が、紀元前 89 年以降、紀元前 40 年頃から始まったことがわかった。以上を通して、本論文は、ローマ時代の建築家が、列柱の操作によって空間的な応答関係を意識的に生み出していたこと、そして、その手法の変遷について明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、古代ローマ時代の遺跡として著名なポンペイの邸宅の先行する実測調査によって蓄積されてきた、正確な寸法の入った膨大な図面資料を元にした実証的な研究である。その研究方法で特筆されるのは、先行研究でも指摘されてきた 2 つの視覚軸の存在や、室内の宴席において最も地位の高い人物と主人が座る位置からの眺めの焦点である〈the places of honor〉を重視した点などを手がかりにした上で、さらに、それらを深く考察するために、ペリスタイルと呼ばれる列柱廊の柱の間隔が均等ではなく、何らかの意図をもって視覚的な効果を目的とする空間演出の手法として使われていたのではないかと、という着眼をもって進められた点にある。そのために、CG を用いたより視覚的な検証を試みることによって、なぜ柱の間隔が変更されていったのか、その根拠を具体的に目に見える形で明らかにしようとする。そして、そうした作業を通して、次のようなことを明らかにしている。すなわち、ローマ時代の建築家は、ペリスタイルの導入された紀元前 1 世紀頃の時点では、幾何学的な秩序をよりどころに、柱間は均等で対称性を重視したものであったが、紀元前 89 年以降、紀元前 40 年頃からは、次第に、列柱の間隔を微妙な形で操作することによって、劇場の舞台装置のような空間の演出を行っていたこと、そして、それは、アトリウムの奥にペリスタイルの列柱廊が増築され、より複雑な内部空間のつながりが意識されたことによって、柱の位置や感覚、壁の大きさまでが、慎重な変更を加えられていったことなどである。

こうした独自の研究方法の背景にあるのは、申請者の建築家としての日本での設計実務経験と、イタリアでの在外研修と建築設計事務所での仕事で培われた建築設計者という立場からの視点なのだと思う。また、そうした視点があつたからこそ、先行する実測図面の中から、考古学の歴史家には想像することが難しい柱間の変遷の意味するものに気づき得たのである。本論文には、建築家としての経験が、新たな研究テーマを発見することへとつながった点においても、大きな意義を持つものと言える。

以上のことから、本論文は、建築の歴史研究において新しい方法と知見を提示したという意味で、重要な貢献を果たすものと評価できる。

尚、本論文の基礎となった論文は、査読済みで掲載済みの審査論文 (1) と、査読済み採用決定済みで掲載予定の審査論文 (2) の 2 編であり、いずれも申請者の執筆である。

- (1) 安田光男, 木村博昭「古代ローマ住宅ペリスタイルの列柱についての研究—リングラの復元図の CG モデル化によるメナンドロスの家列柱における視覚的効果の検証」『芸術工学会誌』第 77 号, 2018 年, pp.126-133
- (2) 安田光男, 松隈洋, 木村博昭「古代ローマ住宅ペリスタイルの列柱についての研究 (2) —ポンペイ住宅のペリスタイル列柱配置における視覚効果の形式とその変遷についての考察」『芸術工学会誌』第 78 号, 2019 年, に掲載予定